

## ク리를加害するヒメゲンバイの生態と防除

山 本 栄 一

(宮崎県総合農業試験場)

YAMAMOTO, E.

Ecology and control of *Uthlerites debile* DRAKE infesting chestnut trees.

宮崎県における県北の一部クリ産地で、1974年頃からヒメゲンバイ *Uthlerites debile* Drake (宮本正一氏同定) が多発生し、早期落葉などの被害がみられたので、早急な対策をみいだすため、本種の生態と防除薬剤について検討した。

## 1. 越冬成虫の活動ならびに第1世代幼虫の発生消長

1976年3月上旬に、現地クリ園内の落葉裏で越冬している成虫を、落葉とともに地上部を網わくで覆った径50cm×50cm×50cm鉢に植栽のクリ樹株元に放飼し、その後の越冬成虫の樹上への出現、加害、産卵状況ならびに幼虫のふ化状況を調査した。越冬成虫の樹上への出現は、クリ樹の発芽時期とほぼ同時期の3月6半旬からみられ、4月4半旬頃までにすべて樹上に移動した。その寄生は葉裏で、樹冠下部の横部に多い傾向があり、口吻を挿入し吸汁するので、加害部分は白色かすり状となった。越冬成虫は5月6半旬には減少し、6月中旬にはごく少数となった。交尾は4月4半旬以降6月にかけてみられ、産卵は5月3半旬以降で葉裏の主脈内に産付された。産

付部分は黒化し、1葉あたりの産卵数は多いものでは200卵以上を数えた。第1世代幼虫のふ化は5月5半旬にはじまり6月1半旬に最も多く、以後減少しながら6月下旬まで続いた。

## 2. 各 態 期 間

含水脱脂綿で葉柄を覆ったりクリ成葉1枚を15cmシャーレーにとり、越冬成虫を1日間放飼、産卵させ、卵期間を調査した。一方、上記方法でふ化した幼虫を連続飼育し、令期間を調査した。成虫については上記シャーレー法で、成葉を取り替えながら第1回成虫を連続飼育し、産卵前期間、生存期間など調査した。

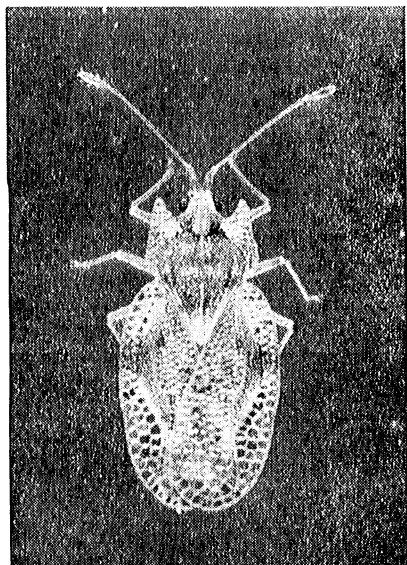
本種の第1世代における卵期間は(5月中旬～6月下旬、平均気温22～23℃)14～17日であり、幼虫は5令を経過し6月中旬～7月中旬における1～4令期間はそれぞれ約3日、5令期間が4～5日で、全幼虫期間は約16日であった。第1回成虫は6月3半旬からみられ、雌の産卵前期間は9～14日、生存日数は最大60日、平均42日であった。次世代幼虫は7月中旬以降9月にかけてみられるが、8月中旬の幼虫期間は1～4令がそれぞれ約2日、5令期間が約3日で全幼虫期間は11日であった。

## 3. 産 卵 消 長

第1回成虫を供試し2のシャーレーによる飼育法で、産卵用のクリ成葉を取り替えながら産卵状況を調査した。産卵は30～50日の長期間にわたったが、特に前半の15日間に集中した。1雌平均の産卵日数は12日、平均産卵数109個、1日最高産卵数は36個であった。

## 4. 殺 虫 試 験

現地クリ園で常用されるPAP、DEP、MEPの各粉剤の防除効果が劣るといわれる本種に対し、バルジャーダスター法で有機燐剤、カーバメート系薬剤など17種類について、成虫を対象に検討した結果、薬量200mgでマラソン、サリチオン、プロパホス、MPMC、BPMC、XMC、PHCの各粉剤の効果が高く、前述の常用薬剤は劣った。さらにこれらの農薬の一部について、薬量50mgでテストした結果、マラソン粉剤、BPMC粉剤の効果が顕著であり、現地での試験散布でも好結果が得られた。



越冬成虫 ×15